日本被団協のノーベル平和賞受賞に際し、被爆二世として核廃絶の志を引き継ぐことを宣言する

被爆二世の会　代表　寺中正樹

2024 年 10 月 11 日、2024 年のノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会（以下、日本被団協）が受賞することに決まった。私たちは、これを断固支持し、世界中から侵略戦争も核の被害も無くしていくために、全力を尽くす。

ノーベル委員会は受賞理由について、日本被団協が「何千件もの目撃証言を提供し、決議や公式なアピールを発表し、国連やさまざまな平和会議に毎年代表団を派遣して、核軍縮の差し迫った必要性を世界に訴えてきた」「核兵器使用は道徳的に許されないと烙印を押す力強い国際的な規範が醸成された」「日本の新たな世代は被爆者の経験とメッセージを引き継いでいる」などをあげている。そして、核兵器の使用は人道上許すことのできない破滅的な結果を導くものであること、世界中の人々に認識させ、それが、80 年間戦争で核兵器が使われていないという一つの事実を生み出したと評価した上で、現在も核兵器保有国は核兵器の近代化と改良を進め、新たな国々が核兵器を持とうと準備を進めていることや進行中の戦争で核兵器を使用するという脅迫も行われていることを憂い、核戦争はわれわれの文明を破壊しかねないと警鐘を鳴らしている。

こうしたノーベル委員会の呼びかけに対して、私たち被爆二世は訴える。

米国の 2 発の原爆によって、広島と長崎は 1945 年末までに推定 12 万人の市民が殺され、その中には植民地支配の中で、強制連行や日本に住むことを余儀なくされた多くの朝鮮民衆を始めとするアジア民衆が含まれていた。生き残った原爆被爆者は、原爆の後遺症（放射能障害）によって、80 年を経た現在も苦しんでいる。また、被爆二世（三世）の中には、親（被爆者）と同じような病気やガンに罹ったり、放射線の遺伝的影響への健康不安で苦しんでいたりする者がいる。ヒバクシャ差別の中で被爆二世（三世）であることを知らされていなかったり、知っていても周りに言えなかったりする状況もある。私たち被爆者（二世・三世）にとって、あの戦争はいまだ終わっていない。これこそが、核兵器の非人道性の最たるものの一つだと私たちは訴える。

私たち被爆二世（三世）は、親の生き様（原爆症との闘い、ヒバクシャ差別との闘い、反戦・反核の闘い）を引き継いで、自らの体験も含めた親の被爆体験を証言することを通して、米国の広島・長崎への 2 発の原爆投下が人道上決して許すことのできない戦争犯罪であることを告発する。

核兵器を廃絶するには、実際に原爆（核兵器）を唯一市民に向けて落とした米国政府が、広島・長崎への原爆（核兵器）使用が戦争犯罪であったことを認め、被爆者（二世・三世）に謝罪と賠償をすることが必要だ。併せて、米国の全ての核兵器の廃棄を強く求める。もちろん、他の国の核兵器も許さない。

日本政府は、米国の核抑止力を否定して、平和憲法に則り非核三原則を貫くこと。そして、核兵器禁止条約に署名・批准して、全ての核兵器保有国に対して、全ての核兵器を廃棄するようヒバクシャと共に呼びかけることを強く求める。

今回の日本被団協のノーベル平和賞は、被爆者と共に歩み反戦・反核の運動を作り出している高校生平和大使やあらゆる地域で草の根の運動をしている全ての人々が受賞したのだ。これを糧にして、今まで以上に反戦・反核・反差別の運動を力強く展開していこう。皆さん、共に闘わん！